



阮社玄甫波抄
一





佛緒天雨波抄序



夫聲者皆其物形理之所
相摩而生者也形理之所
相摩故又有物与生焉聲
物是也民之言語者物感
于心而意萌焉意所結者

亦物也是以借聲物之所
類以貌其意是其言語之
所由發也古之言語其用
聲物精與其意象適矣是
以其言簡而旨深矣今之
言語不論適否而逐俗習

其聲之所用率皆不能与
物切也補苴以周之故其
言繁而旨亦淺矣是古今
之別夷夏之所同者也是
故晚世之以其辭倣古者
率亦皆準厚於薄儕賢於

庸甚者訛白為黑譬猶力
微而運重不取敗於其旨
者鮮矣亡弟成章用力於
倭歌思救世之流弊其所
嘗著者有挿頭脚結二抄其
子成元纂克緒而益又宣

明其義也以夫俳歌亦出
於倭歌之支流故間嘗廣
其先達之良規而以辨今
副墨之訛習著之為俳諧
天爾波抄亦猶以演乃父
之所志也書成乞予言其

事因為題

文化三年丙寅孟冬既望

皆川愿書



目錄

五屬第一

詠屬

や

よ

か

疑屬

あ

や

詭屬

よ

や

ね

禁屬

か

か何そ

十九家第二

曾家

ぶ

こそ

辛家

を

こめ

波家
毛家
仁家
止家

志家
乃家

邊家

良家

能美家

陀尔家

余利家

那年家

基登家

毛天家

加保家

那良家

加天良家

六倫
第廿三

可倫
不倫

將倫

も
子
と
と

の

へ

ら

の
こ

だ
子

より

ち
ん

ご
と

と
と

が
わ

が
ぐ

あ
そ

ア

す

あ

らん
らん

ば

ど
ほ

ど
も

の

が
かり

す

り

ふ

さ
ん

ゆ
あ

し
し

て

ぬ

ら
め

あ
し

有倫

去倫

あり
たり

れ
り

ん

十二身等四

氏身

て

り

ん

之身

し

り

咻利身

り

那利身

り

由久身

り

阿不身

り

也苗身

り

加奴身

り

被身

る

る

令身

す

る

為身

す

如身

ごと

八隊 等五

羨隊

り

り

久隊

り

介隊

り

加之隊

り

奈倍隊

り

猿も小菖をとききとく。能登のこましいをいれぬ
これに。中もちりちり。新持の心を呼ぶらぬ。あつな
に。あつな。切術なり。こましい。わらわ。早。言。重
なる。はく。持。人。麻呂。乃。言。い。れ。す。ら。國。と
よ。も。れ。山。上。に。良。い。あ。ど。ご。ら。乃。さ。し。や。も。不。國。と。め
よ。る。れ。し。あ。あ。あ。あ。め。こ。も。ら。う。の。句。は。わ。り。る。雲
の。不。測。の。成。初。を。た。す。し。と。を。た。あ。る。は。切。術。と。を。年
な。さ。れ。る。あ。り。これ。を。も。く。これ。を。蕉。門。の。さ。し
能。登。と。い。の。入。魂。は。あ。る。も。り。切。術。は。あ。れ。を。す。く。詠
る。の。中。に。さ。は。物。を。言。毫。も。こ。う。が。る。も。や。ま。ま。の。く。し。と。な
て。尔。波。と。こ。の。魂。の。利。は。つ。さ。う。ど。る。物。あ。れ。を。だ。れ。を
明。く。な。せ。ざ。れ。を。い。ら。で。は。切。術。を。こ。ご。き。な。さ。す。

猿も小菖をときき教やると。初めあつなひのこましい
りとかつらぶき。は。能。登。入。魂。の。と。を。よ。く。ん。え。く。切。術。の
折。を。よ。む。ぐ。し。入。魂。の。と。を。大。人。の。う。れ。る。さ。き
年。あ。り。これ。を。い。ら。で。は。切。術。を。こ。ご。き。な。さ。す。あ。ま
ゆ。め。も。も。は。似。たり。と。つ。ら。れ。し。魂。や。も。貴。句。ハ。一。句
も。貴。句。と。も。つ。ひ。ぐ。く。百。葉。句。は。さ。づ。く。もの。こと。ふ。ん。と
よ。も。瑞。猿。葉。集。第。一。の。序。の。後。に。い。ら。し。く。う。を。お。れ。さ。り
支。考。が。評。じ。ら。る。百。韻。の。曰。し。と。を。れ。ぬ。蛇。巻。四。言。を。お
評。云。蛇。巻。を。こ。ら。し。た。ら。川。の。と。か。は。さ。と。つ。ら。る。ぐ。し。と。あ。り
これ。早。し。く。つ。ら。る。と。つ。ひ。を。さ。と。つ。ら。る。と。だ。れ。ぬ。と。さ。ら
あ。る。ぐ。し。と。も。目。ん。人。の。り。ん。を。つ。ら。く。み。さ。る。我
魂。を。あ。れ。く。の。よ。の。ん。と。さ。ら。る。蛇。の。巻。と。つ。ら。る。は。

俳諧天尔波鈔卷之一

北邊大人口授 浦井有國筆受

○五ノ屬

コノ屬家倫身隊ト五門ニワケタル。膝結抄ノ大規模ニシテ。古来今ノ弁ゼザル所也。委久抄ニアリ

○詠ノ屬上

詠とてまじりつゝ。歎息なる。凡例を歎息よりおこる。おあきごころとて。又歎息をおあきとする。例紙一ノ屬とて。たな〜とて也

や 惣ぐるやとふんぬ。内のもや。此他成るを
 せむとすれどあつてさざる事を忠ひるも天波
 也。そのあつてぬ所あるが、ある物自らの詞とせざる
 也。くらゝしりしつるれを四例あり。それどたつたひ
 方りかざるのさる。んをたがふるすたのさる也。はらひ
 方れかたしめゆる。上下れ事。かゝるめかゝる。さる
 れづ也。はら理ハ。やの字よか。能る事。まのさる。さ
 づく。天波。之れ世心をとめてんら。さ
 疑のやハコノ属ニアラズ。別ニ
 下ニ疑ノ属アルニ出セリ

○ 笠一例 冠のヤト云

世例尋はとを「大」とやちし「わの山」喜入みら此也

くめのさう山^日上かつたやくめぢらさし 後撰 言 鴻
 やこい乃物山^{拾遺} ちやうたう紙正例と寺
 春日 さくたのやと井の末寺れ跡と子 且葉
 これを非句「カ」の節を継し中の子 野水 此の九九節
 とつふよ。三井寺にけるよ也 地各ナリ 連滞ノリハ
 アラガルナリ。日 本紀ニ澄アリ。これくえさる。此の由は三井寺と
 おきく。他の寺れ循せぬよ。おねもひとる。ほ
 んたえ。三井寺の末徒や。もすれだ。于戈をある
 ひ。このあ。他のちれつ。ふらたぬ。おとさ。ちる也
 このんをひた。さして。や。乃字よ。とめ。さる也。お
 くら。か。や。く。め。や。と。め。と。い。ふ。べ。ん。を。さ。や。と。い。ひ
 し。もの。や。と。い。ふ。か。く。だ。め。と。い。だ。ん。が。よ。ら。ま。ゆ。べ

さうにやともしもいふをんはけしうぬづん
とつたごぬをいふあまの三軒といふ時を
いふあまある三軒といふんをかりぬと肉の
味をいふいふぬもぬをいふいふぬを
かからぬやとさうづし。さきむ世やとつそ
むふたなる事もあれ。うのおは領をとも
とせ。他のものとも。ひのかたあちの物な
ていふ時の利とさうをてつとづし。これ他物
少く等物。いふぬをさう付島たえ。古今
波をつらひらる。藤原もぬと。世はうはら
思ふべし

冬日 岡崎や矢野のそれそきまれ 杜國

前句「まの馬乃ぬふ」
コノ橋ノ長キニ退屈シタル心ニ見テ。昂人心ヲ活カ
シタル附ガマナリ。コレ猿蓑ノ席ニ晋子ガ入免
トイハル所ノツケヤウナリ。委ニクハソノ席ノ
洋ニイリ

猿蓑 文月やうらもほぬおあせ等 芭蕉
これつらまの西例なり。この文月子の句たる。地
名あるぬど。文月のみつるといふべし。やといひし
句はこれと同じ例なりと知る。○これより
溜とく。やの字の下をさ。よとさつてぬ事をも
よめり。あまぬや梢のたれおまう。おと神や
ゆけどもぬの月と。おとやあや。おと神

曰 管もの子にうりありく冬のみ
 曰 夕の影を福こゝ家の笑ひ多
 曰 春の世やわろくおもしろ侍枯の色
 曰 合時やこのあゝのり子の新叶
 曰 和算や〜ぬ木葉のへむりゆ
 曰 元日や思所もまゝ猫の玉益
 曰 五つがらや雨あり〜ぬ花の糸
 曰 世中や年貢を〜けの舟子の花
 曰 くらひや門をたふり〜豆腐賣
 曰 常也竹の子散る光をちかく
 曰 くの花や〜き柳のをよび〜
 曰 さ〜〜れ子傘あつてゐる 少〜飛

里圃 万平 風國 路草 芭蕉 竹戸 知月 里东 野坡 芭蕉 同 其角

続 猿蓑

曰 月影や雪ふりりく像すき猿
 曰 のころ秋や〜すれ時出る秋の雨
 曰 葉うらや出〜時雨の〜めが
 曰 ころ〜〜昔中ぶら〜牛の
 曰 草のこ〜思〜を〜ふ〜り〜守
 曰 柳のまや秋あがり〜る〜霜の
 曰 五つがらやひ〜た〜の〜子〜み〜
 曰 蜻蛉や〜る〜の味ある竿のさ
 曰 ち〜〜や〜お〜お〜土〜川〜乃〜あ〜
 曰 ち〜〜^{彌腹}〜^{能〜}〜^{画〜}〜^{賛〜}
 曰 月〜げ〜子〜海〜の〜香〜さ〜く〜長〜席〜下
 曰 荷のま〜や〜あ〜〜〜〜秋〜の〜風

圃吟 曰友 園指 風行 我峯 其角 支考 探丸 小鯉 芭蕉 牧童 荷子

「何れも身やちもどふをば例よなる」と。一集、
ゆゑも「致のるや」といふんがごとくあれださ
に「例なるも知るべし」さねどもかく倒よな
るも。こゝに「はり」は「はる」句の「梅ちるや」と
た「ちる梅や」といふた。うのんちよとてり
梅ちるといふ。敬をいふことを伴ふ。し
ふこ。「妻ちるや」といふ。ちるは「梅に」
かつ。ふいづひめをりは。つらひやとて
例よの「し」

句集 時鳥あくや五月のあふめ物 芭蕉
岩俵 梅ちるや尔の光の目れり 芭蕉
猿蓑 雪ちるや梅の影乃前 芭蕉

まゝの梅もど。よな物めあつても。は例なる
あり。ふた。例あがも。ふのほつてき。る
例なるるありを。同例ありとてる。し。
下みゆめや。ふり。すべが。ん

荒野 修くやを。い。大原。嶺。の。花 伴六
荒野 ちる梅ちるや。ぬさ。望。の。時。鳥 杏雨
同 連ちるや。流。舟。ハ。ち。り。一。花。の。時 荷子

結 猿蓑 ちり。し。や。雨。さ。な。さ。そ。原。蓑。の。声 雪芝
同 自由さ。子。月。を。遠。り。玉。巨。焼 洞木
同 見え。す。ら。子。持。ひ。あ。の。層。氷 谷水
同 涼。し。き。や。竹。振。り。し。く。菰。づ。こ。い 羊残
同 あり。し。き。や。麻。本。の。心。志。も。ち。と。あ。ま。り 惟鏡

曰 竹もさぬさきや 鏡のうらみ 乃梅
 宗儀 朝見の湯を片膝や 唐の花
 曰 今頃の時ふあけ 月百ちや 山嶽
 猿蓑 ころろあき代 衣あき 中とさる
 曰 八相のゆが 起り中や 却とさる
 続 阿の 猫のこゝろ 中す 朝や 冬月
 猿蓑 ささづ くれのま 女 流川 大和川
 宗儀 ねちつ ちえ 魚屋 くら せ 子 梅がり
 曰 十五日 せり 子 睦月 の古 子 賣
 曰 雀より やす 女 池 子 衣 ぐく
 曰 花す ぎと しく ぢり 子 村 さい 兜
 曰 目や みる 中 の 列 子 年 一 の時 宜

芭蕉 孤屋 望岳 羽衣 古草 利午 之草 雪芝 坐量 孤屋

続 猿蓑 けり ねち しく 子 唐野 の 唐 北 角
 猿蓑 人の 子 又 とも くれ しく 流 子 梅 海 苔
 曰 山 ぞり あり 中 の 柏 子 子 雛 声
 曰 禅 寺 小 ね ち ち 唐 子 神 毎 月
 曰 ち ち 子 ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 曰 子 ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 曰 引 け ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 曰 狼 小 ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 続 猿蓑 黒 小 ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 曰 三 小 ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 曰 ち ち ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち
 宗儀 柳 小 ね ち ち 唐 子 ね ち ち ち

汎 雛 松 穿 芭蕉 凡 兆 瓶 人 右 来 史 邦 士 芳 乙 明 洞 本 如 技

同 初言のつらき馬の鼻がしら
 同 唐来のふげらふ新子免あり
 同 女のくる津のの葉や二三本
 同 鳥のゆきやけぬみくもやれの未
 同 常のし雨のゆづやぬあめい
 ○まゝゆづ〜しを例 ちのち
 句集 夏の月清油ありぞく赤坂や 芭蕉
 こぬあり。こぬえよふあまをりくすをされるは
 夏の月や清油ありぞく赤坂をく〜と子
 へをを一句を皆やに〜うけく〜なわ月め
 びどをなをとぬ息をれ〜く早をよまに
 ける轉例の例の一例あり。〜と〜の例の例

ちのりり〜し。こぬ〜も〜も。菊のてん波を自在
 み利ひ〜れ〜事あま〜も也。今世の人志を
 断るす〜し

○さ〜とぬ〜の例に〜〜のうらあひすの
 例と〜が〜あり〜の〜別 とも〜う〜を
 事〜ち〜り

荒野 山川や物のかほのちをさす
 員外 日みづぞやふたなませんあ〜かに
 猿蓑 春のぬふせ蓑ふはくもん雛子のあ
 春日 ちのの影やづつまのあまふれん
 こぬ〜のふれ〜と〜らん〜ん ち〜と〜
 あを守付た。すよ〜た。かあ〜疑の例乃例あり

落椿 舟泉 酒堂 羽紅

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

薄芝
且葉

猿蓑

曰

つそがしつ津の志ぶれの志帆行帆
家つそがしつ津の志ぶれの志帆行帆

市柳
傘下

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

一奴
一人

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

一泉
一奴

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

柳風
穴蘭

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

一泉
一奴

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

山轉
景柁

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

野荻
大竹

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

前口
一井

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

荷弓
野水

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

史邦
曾良

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

史邦
曾良

荒野

曰

あけのち風車賣る家花の時
あけりくちのちるひのちあけりくちのち

史邦
曾良

宍俵

瓢

曰

荒野
員外

春日

続
猿蓑

曰

荒野
員外

宍俵

公相ヨリ暮ノイカハナリケレバ
此とつゝこゝろやうし子年々おの
るこの倉もむ川く持やちの年
めづしし眉意ありと立とあり
のどろし子やちやき海より荷をと能
れどけやん筑紫の被伊那力の帯
母方の致免つゝし子 成り了始
枯れがら葉を物しや 新成を
雨やまゝくやのち望くねもしるや
めづしし御心ぶ花つんのちのめし
かろみごとく玉所をづさほとも俗之のトヤノトヤノ
らよちちるはこれ以例じりいとさるづし。但此トヤノ
と子俗をさるゝ。すちをちとさるゝあまがとく。

素花

珍頑

荷号

昌宏

山人

山峰

万平

落梧

杉風

他の猶ぞれぬとくはしとくふんを明くかなり

此例ぬるるはしとくふん

荒野
員外 涼しやとむらりもとく家内を 野水

とれしあり。これ先涼ニイカトとふんはく。この例

もあす疑のやちり。さるゝかやうにしむる

やめ。心をつけくわりの。又吾はくを。や

いといふ天尔波あり。これそけ杖のや乃例とあ

ちるやい 定頼集 何さびぬやい 好忠集 ちるどこれと

連儼よみみん守。歌はくも。後世にえつそをぬる

波あり。ヤイト子俗をのふらむ。くそとくハ

○ 築三例 中のやト云

の料簡なるなりありあるの循せられぬと。やが
たふ可なるかまの循せぬとのる利ありとある
べし。但しその字の運新をいづるありあり
んをかきしぬと

けよとふてお波をつらふんぬ。かめ
牙がらるるもさるに。むふをうりぬ
目切つげらるが。我爺はくしとれ
ころがぶししとるかきしぬと

あ

これと。つかうするふ。どうするれやど。ふあはる
あさぎ。又俗さる。一布有あ。めりさる。あなど。ふ

あはる。あさぎ。縁のあ。ふあは。ハドウル。下ノ
禁属ニ出セリ。又メツサウナナドムハ。なるトイフ。世
詞ノハ。グカリタルニ。コレトハ。別ナルヲ。知ベシ。世
物の持合の他。のちよをさる。教員やう。くく。飯を

食する時。そくて。ふあを俗は。ハ。菜と云。つ。一
是を。あ。とつり。ふの古。あ。とつり。と。三。は。く
は。世を。サイ。と。ふ。ち。さ。る。し。は。く。今。菜。と。ふ。を

魚肉を。も。野。菜。を。も。押。る。め。て。ふ。事。昂。つ。に
く。の。あ。と。ふ。菜。は。く。今。あ。と。ふ。を。野。菜。の。方。は
を。り。め。こ。り。く。ク。思。ふ。た。つ。を。ぬ。や。う。な。あ。れ。り。野。菜。古。ハ
料。ニスル。寸。ニ。あ。と。イ。魚。モ。食。料。ニスル。寸。ヲ。ト。イ。フ。ニ。タ。バ。ツ。子。ニ。ハ
菜。ハ。ワ。各。チ。イ。ヒ。魚。ハ。ハ。を。ト。イ。フ。ガ。古。ノ。言。也。サ。レ。バ。今。サイ。ト。イ。フ。ハ

あ

この別紙つゝあるまゝに得あり。名の字を別と列せり
を。ことごとく。報人と子名を。報人よよむりあり
著り号とを。報れぬとあり。すゞく名を。あり
る。報れぬとあり。た。報れぬとあり。他あり。報れぬ
とあり。ふ。報れぬとあり。とあり。づ

能譜天雨波抄卷之一終



